

氏名	梅津 篤	
学位の種類	博士（英語学）	
学位記番号	博甲第94号	
学位授与年月日	2012年3月22日	
審査研究科	外国語学研究科	
論文題目	Studies of Repetition and Its Function in English Literature	
論文審査委員会	(主査)	大東文化大学教授 鈴木 敬了
	(副査)	大東文化大学教授 山崎 俊次
	(副査)	大東文化大学教授 大月 実
	(副査)	広島女学院大学教授 米倉 綽

梅津 篤 博士論文 審査報告

梅津篤氏は平成14年3月大東文化大学外国語学部英語学科を卒業後、同年4月に同大学大学院外国語学研究科英語学専攻修士課程に入学し、平成16年3月に修士課程を修了した。その後、平成18年4月より博士課程後期課程に入学し、英会話スクールや予備校の講師として勤務しながら博士論文の執筆を目標に研究を継続し、このたび博士学位申請論文を提出する運びとなった。

博士学位申請論文 **Studies of Repetition and Its Function in English Literature**（以下、本論文と略称）に関わる研究論文として以下の論文があり、これらの研究業績を基盤として本論文を執筆し「外国語学研究科博士課程後期課程英語学専攻の学位に関する細則」（平成23年5月16日改正・施行）に則り、平成23年9月30日に大学院事務室に提出した。その後、博士論文指導委員会（委員長大月実教授）は大学院事務室での2週間にわたる事前開示において特に異議のコメントがないことを踏まえ資格審査を行い、10月31日の本論文提出を認めた。

これまでの論文は7篇あり、1篇は学外の全国規模の学会である日本文体論学会の学術雑誌に掲載され（論文7参照）、また学会発表は4件あり、このうち2件は全国規模の学会である日本中世英語英文学会における学会発表であり、特筆すべきは“**God as a Unit of Repetition in The Wreck of the Deutschland**”と題する論文であり、梅津氏が、平成22年7月 国際ホプキンス学会（**The Hopkins Conference**）米国ゴンザーガ大学（ワシントン州スポケーン市）で開催された国際学会で発表を行っている点である。

1. “A Comparison between Writing in English and Japanese by American and Japanese Students” 平成 16 年『大東文化大学外国語学研究』第 5 号 大東文化大学大学院外国語学研究科 pp. 110-116.
2. “Implications of the Use of “AND” in the English Compositions of Japanese Students 平成 18 年『外国語学会誌』No.35 大東文化大学外国語学会 pp.177-192.
3. “The Use of And for Emotional Expression” 平成 19 年『外国語学研究』第 8 号 大東文化大学大学院外国語学研究科 pp. 91-102.
4. “Repetition for Stylistic Effects－ In the Case of *or*” 平成 20 年『語学教育研究論叢』第 25 号 大東文化大学語学教育研究所 pp. 149-162.
5. “Repetition for Stylistic Effect in ME Literature” 平成 21 年 『語学教育研究論叢』第 26 号 大東文化大学語学教育研究所 pp. 211-225.
6. 「ジュリエットのセリフにおける反復の効果」平成 21 年 『外国語学会誌』No.38 大東文化大学外国語学会 pp. 285-296.
7. 「『騎士の物語』における repetition の効果」平成 21 年 『文体論研究』日本文体論学会 第 55 号 pp.13-29.

1. 論文の要旨および特色

本論文は『ベオウルフ』、チャーター作品、シェイクスピア作品、ディケンズ作品、そしてホプキンズ作品という英文学の代表的作品の中に見られる反復に焦点を定め、各作品全体における反復の機能及び効果を調査するものである。反復の効果と言えば強調と考えられがちであったが、本研究において独自に算出した各作品全体の反復率からは、反復には語り手及び著者の、聴衆及び読者の注意を喚起しようとする意識が反映されている可能性が高いと言える。

本論文の構成は以下のとおりである。

1. Introduction: “What Is the Function of Repetition?”

2. Literature Survey

3. Methodology: Repetition Rates and Their Pre-production

4. Repetition in *Beowulf*

4.1. Verification of Repetition in *Beowulf*

4.2. Repetition Rate of *Beowulf*

5. Repetition in Chaucer's Works

5.1. Repetition in *The Knight's Tale*

5.1.1. Verification of Repetition in *The Knight's Tale*

5.1.2. Repetition Rate of *The Knight's Tale*

5.2. Comparison of *Love* and *Allas* between Palamon and Arcite in *The Knight's Tale*

5.2.1. An Investigation of *Love* and *Allas* in the lines of Palamon and Arcite

5.2.2. Who is More Emotional, Palamon or Arcite?

5.3. Repetition in *The Franklin's Tale*

5.3.1. Verification of Repetition in *The Franklin's Tale*

5.3.2. Repetition Rate of *The Franklin's Tale*

6. Repetition in the Lines of the Characters in Shakespeare's Works

6.1. Repetition in Romeo's Lines in *Romeo and Juliet*

6.1.1. Verification of Repetition in Romeo's Lines

6.1.2. Repetition Rate of Romeo

6.2. Repetition in Juliet's Lines in *Romeo and Juliet*

6.2.1. Verification of Repetition in Juliet's Lines

6.2.2. Repetition Rate of Juliet

6.3. Comparison of Repetition Rates of Romeo and Juliet

6.4. Repetition in Shylock's Lines in *The Merchant of the Venice*

6.4.1. Verification of Repetition in Shylock's Lines

6.4.2. Repetition Rate of Shylock

6.5. Repetition in Hamlet's Lines in *Hamlet*

6.5.1. Verification of Repetition in Hamlet's Lines

6.5.2. Repetition Rate of Hamlet

6.6. Repetition in Othello's Lines in *Othello*

6.6.1. Verification of Repetition in Othello's Lines

6.6.2. Repetition Rate of Othello

6.7. Repetition in Lear's Lines in *King Lear*

6.7.1. Verification of Repetition in Lear's Lines

6.7.2. Repetition Rate of Lear

6.8. Repetition in Macbeth's Lines in *Macbeth*

6.8.1. Verification of Repetition in Macbeth's Lines

6.8.2. Repetition Rate of Macbeth

6.9. Comparison of Repetition of the Four Heroes

7. Repetition in Lines of a Character in Dickens' Work: *A Christmas Carol*

7.1. Repetition in Scrooge's Lines

7.2. Verification of Repetition in Scrooge's Lines

7.3. Repetition Rate of Scrooge

8. Repetition in Hopkins' Work: *The Wreck of the Deutschland*

8.1. Repetition of the Imagery of God

8.2. Repetition Rate of the Imagery of God

9. Conclusions

Notes

References

第1章：本論文は、英文学の代表的な11の作品の中にみられる反復に焦点を定め、「反復のもつ機能とは何か」という問いに答えることを目的にしたものである。代表的な11作品とは、英文学において最も古い詩であり古英語で書かれた『ベオウルフ』、中英語期の最も代表的な詩人であるジェフリー・チョーサーによって書かれた『カンタベリー物語』の「騎士の物語」と「郷土の物語」、英語史において最も優れた劇作家として知られるウィリアム・シェイクスピアによって書かれた『ロミオとジュリエット』、『ベニスの商人』、『ハムレット』、『オセロー』、『リア王』そして『マクベス』、ビクトリア朝において最も優れた作家のひとりであるチャールズ・ディケンズによって書かれた『クリスマス・キャロル』、そしてビクトリア朝において最も影響力のある詩人のひとりとして知られるジェラルド・マンリー・ホプキンズによって書かれた『ドイツランド号の難破』である。本研究の主たる目的はこれらの代表的な作品の中にみられる反復を調査することで、英文学において伝統的に用いられてきた反復という技法の機能を可能な限り深く掘り下げていくことにある。

第2章：反復はしばしば洗練されていない文体として考えられ避けられるべきものとして扱われることが多いが、一方で物事を強調し結束性を生むものとして評価される場合もある。反復は伝統的な口承のテクニックであり『ベオウルフ』が書かれた古英語期にはすでに存在していた。反復を用いた表現技法の中には **parallelism** (対句法) や **quaesitio** (疑問接続) があるがいずれも本研究で扱う英文学作品のいくつかにおいて効果的に用いられている。よく見られる反復としては繰り返される **and** が挙げられるが、子供じみた文体と批判される一方で使われ方によっては高く評価されるものもある。『ベオウルフ』、チョーサー作品、シェイクスピア作品、ディケンズ作品及びホプキンズ作品に関する文体的な研究や反復に関して触れている先行研究はあるが、多くは部分的及び断片的な反復の効果に焦点を当てた研究であり、英文学における反復のもつ機能を作品全体という視野でとらえた研究は本研究が初めてと言える。

第3章：本研究で扱う反復の定義とは一度用いられた表現(語彙、名前、句、文法構造等)が繰り返して用いられることである。本研究の最大の関心は反復が起こる箇所において何らかの効果を与えていることにある。それ故に反復が効果を与えている可能性が極めて低いと判断された際には、その反復を調査対象から外した。英文学において反復のもつ機能とは何かという問いに対して明確な答えを出すために広範囲に行われた調査はほとんどないと言える。先行研究において反復は常に文体的要素の一部としてのみ扱われており、多くの場合反復の効果は強調にあるとして処理されてきた。英文学作品全体という範囲で反復の効果を明確な目的とした研究は行われておらず、それ故に本研究を行うにあたっては新たな分析方法を生み出す必要があった。このシステムは二つの過程に分けられる。前半の過程では各作品において反復の起こる箇所を明確に特定することである。後半の過程では各作品の各場面における反復率が計算によって求められ、各作品の反復率を示す表が作成される。それらを基に作品全体における反復の機能が議論される。特に反復率の分析法の有用性を示すため、以下の3点に比重をおいている。5.2.では二人の騎士パラモンとアルシータ両者の用いる *love* と *allas* を比較し、どちらがより感情的なキャラクターとして描かれているかを調査している。6.3 ではロミオとジュリエットの平均反復率を比較しどちらのキャラクターがより感情的または情熱的と考えられるかを議論している。6.9 ではハムレット、オセロー、リア、マクベスの平均反復率を比較し差異を検証している。なお調査対象とした11作品のうち10作品は語彙や句や文法構造の反復に焦点を当てているが『ドイチュランド号の難破』においては神の偶像の反復に焦点を当てている。

第4章：本章では『ベオウルフ』に用いられる反復に焦点を定め調査を行っている。『ベオウルフ』の最後の場面において反復率が30.4%と作品全体の中で最も高くなっている。このことは主人公ベオウルフが最も称賛されるクライマックスの雰囲気を作り出す要素のひとつとして反復が用いられている可能性を示唆するものである。

第5章：本章ではチャーサーの著した『カンタベリー物語』の「騎士の物語」と「郷土の物語」における反復に焦点を定め調査している。「騎士の物語」では13カ所で反復が用いられており、全箇所の効果が調査されている。反復率は物語のクライマックスである第四部において跳ね上がっており、反復が物語のクライマックスの雰囲気を作り出す要素の一部となっていることを示唆するものである。更に二人の騎士パラモンとアルシータの *love* と *allas* の使用に焦点を当て調査を進めた結果、*love* に関してはパラモンの使用率が7.9%、アルシータの使用率が8.5%であることが判明し、また *allas* に関してはパラモンの使用率が2.3%、アルシータの使用率が6.5%であることが明らかとなった。この結果はアルシータがより感情的なキャラクターとして描かれていることを示唆している。「郷土の物語」では10カ所において反復の使用が確認され、全箇所の効果が調査されている。反復率の上昇は物語の最後に見られ、物語のクライマックスを作り出す要素の一部として反復が用いられている可能性を示している。

第6章：本章ではシェイクスピアの6作品『ロミオとジュリエット』、『ベニスの商人』、

『ハムレット』、『オセロー』、『リア王』そして『マクベス』の中からロミオ、ジュリエット、シャイロック、ハムレット、オセロー、リア、そしてマクベスの7人のキャラクターのセリフに用いられる反復に焦点をあて調査を進めている。ロミオのセリフでは6カ所において反復の使用が見られる。ロミオの反復率は作品の終わりであり、ロミオが毒薬を飲み死ぬ第5幕第3場で最も高いことが明らかとなった。このことから反復により強調される感情的要素が場面の悲劇性を高めていることに寄与していると考えられる。ジュリエットのセリフでは12カ所において反復が確認された。反復率はジュリエットが仮死状態を作り出す薬物を飲むことの結果を心配する第4幕第3場において最も高い。これはジュリエットが事実上一度死ぬのと同様の状態になる第4幕第3場の重要性と観客の注意を喚起する必要性とに関係があることを示唆している。更にロミオとジュリエットの平均反復率を比較すると、明らかにジュリエットの反復率がロミオの反復率よりも高くなることがわかる。これはジュリエットの方がより感情的または情熱的なキャラクターとして描かれていることを示唆している。シャイロックのセリフでは12カ所で反復の使用が見られ全箇所の効果が調査されている。第3幕第1場での反復率の高さは注目すべきもので第3幕第1場においてシャイロックが劇中最も感情的になっていることと重なる。ハムレットのセリフでは45カ所において反復が確認された。ハムレットが今クローディアスを殺すべきかどうかを自問自答し殺すのは今ではないという結論にいたる第3幕第3場においてハムレットの反復率は最も高い。これによりハムレットの葛藤は第3幕第3場において最も強調される可能性が示唆される。オセローのセリフでは18カ所で反復が確認された。オセローがハンカチに取りつかれデズデモーナとの会話でハンカチを何度も繰り返して用いる第3幕第4場において反復率は最も高くなる。第3幕第4場においてオセローの嫉妬は最も強調されるという可能性が示唆される。リアのセリフでは31カ所で反復が確認された。リアがゴネリルとリーガンに裏切られリアが狂人へと変わっていく姿を描く第2幕第2場においてリアの反復率は最も高くなる。リアのキャラクターにおいてリアの狂人ぶりは最も特徴的と考えられるが、リアが狂人へと変わっていく姿を描くこの重要な場面で反復は効果的に用いられていると言える。マクベスのセリフでは13カ所で反復が確認された。マクベスがダンカンを殺害した際に起こった事柄を説明する第2幕第2場においてマクベスの反復率は最も高くなる。この反復率の高さはマクベスの不安感や恐れ、または興奮を反映するものと考えられる。更にハムレット、オセロー、リアそしてマクベス4人のキャラクターの平均反復率が比較検証されている。ハムレットとオセローの平均反復率はほぼ同じであるが、リアの平均反復率はハムレットとオセローの平均反復率よりも約3.5%高くなり、マクベスの平均反復率においてはハムレットとオセローの平均反復率よりも約6.5%高くなることがわかる。反復率の上昇がキャラクターの悲劇性を高める要素のひとつになるものであるとするならば、シェイクスピアはリアをハムレットとオセローよりも悲劇性の高いキャラクターとして描き、マクベスを四大悲劇の中で最も悲劇性の高いキャラクターとして描いたという可能性を示唆している。

第 7 章：本章ではディケンズの著した『クリスマス・キャロル』のスクルージのセリフにおける反復が調査されている。全セリフ中 6 ヶ所において反復の使用が確認された。スクルージがクリスマスの朝に幸福感を表現する最終章において反復率は最も高く、反復がクライマックスの雰囲気を作り出す手法のひとつとなっている可能性を示唆している。

第 8 章：本章ではホプキンスの『ドイツランド号の難破』における神の偶像の反復が調査されている。特異な現象として第 13 節から第 16 節の間に神の偶像が全く現れないというものが挙げられる。神の偶像が多く繰り返される詩の中で、神の偶像が突如現れなくなる第 13 節から第 16 節は船の難破により多くの人々が犠牲になる絶望的な状況を強調して伝えていると考えられる。

第 9 章：本研究において調査した反復にはさまざまな効果があることが判明した。反復には事柄を強調するという性格があることは確かであるが、それだけが反復の機能ではないことが本研究を通して例証されたと言える。更に反復率を算出し作品全体という視野で反復という現象を考察することで、反復が作品において重要性の高い部分で多く使われることが解明された。したがって、反復は作者及び語り手が読者や聴衆の注意を喚起したいという意識を反映しているという可能性は否定し難いものと思われる。

2. 論文の審査内容および評価

博士学位論文審査委員会は 10 月 30 日の本論文提出後、外国語学研究科委員会の議に基づき発足した。委員は、コーパス言語学を専門とする山崎俊次教授、意味論を専門とする大月実教授、学外からは歴史英語学で特に形態論および文体論分野で著名な米倉綽教授（近代英語協会会長）を副査に迎え、歴史英語学分野の指導教授として鈴木が主査をつとめた。

口述試験は平成 24 年 2 月 4 日、大東文化会館を会場とし公開審査で実施された。始めに本人のプレゼンテーションがあり、続いて各審査委員との質疑応答が行われ、引き続き、別室にて博士学位論文審査委員会の協議が行われた。各審査委員のコメントを以下にまとめる。

この分野のパイオニアたらんとする大変意欲的な研究であり、広範囲に亘って調査にエネルギーを注ぎ込んだ労作である。反復は、確かに情報伝達としては余剰性があるが、言語の藝術たる文学作品においては剰余の働きがあるわけで、その効果に着目して明らかにしようとした意義は大きい。従来、部分的な指摘はあっても具体的な作品全体の中で調べた先行研究はなく、特に反復率が作品の重要な場面と相関していることを調査して明らかにした点は、高く評価できる。言語記号の指示・外延ではなく喚情・内包の機能・側面に光を当てた点でも貴重な研究と言えよう。

今後の展望としては、修辞学の概念を組み込み類型化することにより更なる可能性が拓かれると思われる。全体的頻度だけでなくタイプごとの頻度・内容との相関を検討することにより量的な頻度の違いのみならず質的差異を明らかにすることができよう。また、文の種類・文法概念との関連性を検討することで着実な発展性が期待できるであろう。

本論文は古英語から現代英語における主要な文学作品を取り上げて、それぞれの作品にみられる文体的あるいは修辞学的特徴としての「反復表現」(repetition)の言語学的・文学的機能および効果を考察している。この考察を通して、梅津氏は作者(あるいは語り手)および聴衆(あるいは読者)の観点から個々の作品を詳細に調査・分析することで、この「反復表現」が英文学において極めて重要な文体的工夫であることを明らかにしている。

第1章では「反復表現」に関する主要な先行研究を検討し、反復表現が果たす機能と意味は何かを解明するためには、古英語、中英語、近代英語、そして現代英語における主要作品にみられる「反復表現」を詳しく調査・分析することが必要であると主張する。

第2章では、*Beowulf*、チョーサー、シェイクスピア、C.ディケンズ、G.M.ホプキンズにみられる「反復表現」がそれぞれの作品の主題(subject matters)によって、その機能および効果が異なることを述べる。

第3章、第4章、第5章、第6章、第7章、第8章で、*Beowulf*、チョーサーの韻文作品、シェイクスピアの悲劇作品、C.ディケンズの *A Christmas Carol*、G.M.ホプキンズの *The Wreck of the Deutschland*にみられる「反復表現」を具体的に調査・分析し、反復表現には‘and + V’、‘who + X’(Xは任意の語(句)の意味)、「some will + V」、など様々な型があることを明らかにしている。特に、梅津氏はシェイクスピアの悲劇作品(他に喜劇作品を一つだけ取り上げているが)の論述に多くのページを割いて「矛盾語法」(oxymoron)、「疑問接続」(quaesitio)、「行頭反復」(anaphora)の機能とその意味を、それぞれの作品の中心的人物と関連させて検討し、有意義な事実を指摘している。

以上の内容に関して、「反復表現」と調査対象にした作品との関係、作品による「反復表現」の機能・意味の相違について、口頭試問で質疑応答をおこなった。この中で、梅津氏は、本研究で論じた「反復表現」が文学作品をより深く理解するためにいかに重要な要素であるかを、具体的な事例を提示しながら説明した。これにより、梅津氏の本論文が今後の文体的研究に大きな貢献をすることが証明された。この点から、梅津氏の本論文は課程博士の学位に相当する内容と評価できる。

本論文は、古英語の『ベオウルフ』、中英語のチョーサーの作品、さらに近代英語のシェイクスピアの作品、ディケンズの作品、ホプキンズの作品の11作品をデータベースに、それら文学作品に使用される繰り返し(Repetition)の機能とその役割を考察した論文である。多くの作品を始めから終わりまで分析し、作品全体の中のどの部分、どの章に繰り返しが行われているか細かく分析した労作であると言える。本論文は繰り返しが行われている箇所を計算し、数値化している。

今後の研究発展に寄与すると思われる審査委員のコメントをまとめる。構成面に関しては用例に多くのページを割いているため、またシェイクスピアの扱う比重も高いため、各作品のバランスに配慮し、より簡潔な構成が望まれる。それによってさらに議論が深まり、より普遍的な規則を発見できるであろう。加えて各時代の代表作品を含む11作品をデータベースにしているがその理論的な面から選択根拠を明確にすると良いであろう。考察に関

しては、それぞれの作品において反復がさまざまな効果を出していると主張しているが、それらの分析結果の共通性、類似性について更に科学的分析が必要であろう。以上の点を考慮することにより、繰り返しは、読者の注意を喚起するという梅津氏の主張がより説得力のあるものになるであろう。表記に関しては、本文における引用文献のスタイルを英語学分野の一般的なものに変更することが望まれる。

以上、今後の改善点が指摘されているが、内容面では、本論文の基盤をなす論文が全国学会の学術雑誌に掲載されるなど高いレベルに達しているものと認められる。また本論文のテーマで歴史的にこれほど広範囲に研究されたものはこれまでなく、極めて独創的なものと言え、分析結果の位置づけも的確である。したがって梅津篤氏の設定した研究目的は十分に達成されている点に鑑みて本論文は課程博士の学位請求論文として十分な水準に達しているものと判断できる。

3. 結論

以上の審査内容および論文評価に基づき、本論文を審査対象とする博士学位論文審査委員会は全員一致をもって、本論文は博士（英語学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する次第である。